

花博自然環境助成シンポジウム

# 熊楠から受け継ぐエコロジイの思想と未来に向けて

## 発表集



※写真提供：南方熊楠顕彰館



※



公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

花博自然環境助成シンポジウム  
「熊楠から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて」

日時:令和3年8月31日(火)12:30~16:00  
場所:オンライン開催(Zoom ウェビナー)

---

【目次】

開催概要 .....	2
主催者挨拶 .....	3
基調講演 志村 真幸 氏(南方熊楠顕彰会理事) .....	4
発表① 天神崎の自然を大切にする会 .....	12
発表② 南方熊楠顕彰会 田辺・南方熊楠翻字の会 .....	20
発表③ 番所山を愛する会 .....	26
パネルディスカッション .....	32

## 開催概要

### 花博自然環境助成シンポジウム～熊楠から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて～

#### 1. 開催趣旨

国際花と緑の博覧会記念協会の「自然と人間との共生」という理念のもと、エコロジーの先駆者として、南方熊楠が地域に残した功績を辿ると共に、ゆかりのある活動団体の発表の場を設け、地域固有の人・自然・文化を発信し、情報の共有や協働のネットワークを促進する。また、気候変動やパンデミック等の現代の環境諸問題に対して熊楠的視点から探ることにより、自然と人間との新たな関係性について探る。

2. 主催 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

3. 共催 公益財団法人 南方熊楠記念館、南方熊楠顕彰会

4. 後援 環境省近畿地方環境事務所、田辺市

5. 日時 令和3年8月31日（火）12:30～16:00

#### 6. 次第

12:30～12:35	主催者挨拶
12:35～13:20	基調講演 志村 真幸 氏（南方熊楠顕彰会理事） 休憩
13:30～13:55	発表① 天神崎の自然を大切にする会
13:55～14:05	トークセッション
14:05～14:30	発表② 南方熊楠顕彰会 田辺・南方熊楠翻字の会
14:30～14:40	トークセッション
14:40～15:05	発表③ 番所山を愛する会
15:05～15:15	トークセッション 休憩
15:25～16:00	パネルディスカッション (登壇者) 志村 真幸 (南方熊楠顕彰会理事) 丸山 宏 (花博自然環境助成審査委員会委員長) 佐倉 統 (花博自然環境助成審査委員会委員) 鷺谷 いづみ (コスモス国際賞委員会委員)

#### 7. 実施場所/実施形態

Zoom ウェビナーによる、無観客、WEB 配信で実施。

8. 視聴者数 140 名

## 主催者挨拶

片山 博昭

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 専務理事

本日は「花博自然環境助成シンポジウム 熊楠から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。お一人お一人に、心から感謝申し上げます。

また、このシンポジウムの実施に向けて、南方熊楠記念館の皆様、南方熊楠顕彰会の皆様には、多大なご協力を賜りました。この場をお借りして、御礼申し上げます。私ども、花博記念協会は1990年に大阪の鶴見緑地で開催された花の万博の理念継承を目的に生まれた公益財団でございます。花の万博は、「自然と人間との共生」という理念を掲げました。当時、オゾン層の破壊や森林の減少など環境問題に関心が高まりつつある中、美しい花と緑があふれる会場で、自然の価値の再確認や創造、自然と人間がどのように歩いていくべきかを問うものでありました。

本日は、エコロジストである南方熊楠が地域や私たちに残した功績をたどると共に、ゆかりのある地域団体の活動から、その地域固有の「人・自然・風土とその関わり」について発信したいと思います。

また、私たちは現在、地球規模での気候変動の影響や、コロナ禍で生活が激変している中、自然と人間との新しい関係性について、見つめ直し、あるべき姿を探って行ければと思います。

参加者の皆様、どうぞ時間の許す限り、このシンポジウムで楽しく学び合いましょう。ご清聴、ありがとうございました。私のあいさつとさせていただきます。



# 「熊楠から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて」

南方熊楠顕彰会 理事 志村 真幸

### 南方熊楠の人物像

南方熊楠は 1867 年、現在の和歌山市に生まれました。当時の和歌山は御三家の一つ、紀州徳川家のお膝元で、全国でも 10 本の指に入る大都市でした。熊楠というと熊野の野人というイメージを持っている方も多いかもしれませんが、実際には町っ子だったというのが、現在の熊楠研究者の見解です。植物や生物への関心は、都会にあってこそ生まれるものなのかもしれません。

熊楠は地元で和歌山中学まで終えた後、東京に出て大学予備門（現・東京大学）に入ります。しかし、熊楠はあまり勉強に熱心でなく、図書館に入り浸り、数学が苦手だったこともあり、結局、退学することになりました。このころから熊楠は在野として生き、「官」とはなじまない生活を送っていくこととなります。

熊楠はいったん地元に戻った後、アメリカに渡って各地で植物採集に励み、やがてイギリスに渡ります。イギリスでは、キュー・ガーデンにしばしば通いました。現在でも熊楠の採取した標本は、キュー・ガーデンに幾つも収められています。その他にも、ロンドンでは大英博物館で、正規の職員ではありませんが、東洋の文物に関するアシスタントを務めたり、現在でも世界最高峰の科学雑誌とされる「Nature」に英語の論文を発表するようにもなりました。熊楠は多様な顔を持った人で、キノコ、シダ植物、変形菌といった生物研究にも取り組みましたし、世界各地の民族の生活習慣・迷信・民話などを比較しながら人類学・民俗学的な研究をしたり。特に西洋と東洋の比較文化は彼にとって重要なテーマでした。近年では『今昔物語集』の説話研究者としての側面も高く評価されるようになっていきます。

また、熊楠は文筆家としても知られていました。新聞や雑誌に、代表作である『十二支考』のような随筆を寄せ、その中で計り知れないほどの蘊蓄を披露して、全国の読者をうならせていました。昭和天皇へのご進講とあって、生物学の講義をしたことでも評価を高め、地元でも名士的な存在となっていきます。何度か大学に誘われたり、アメリカから招聘されたりもしましたが、学問をお金にすることに抵抗があったのか、生涯をアマチュア、在野のままで過ごすこととなりました。

熊楠は、アメリカ、イギリスで十数年間過ごした後、1900 年に日本に帰ってきます。弟が継いでいた和歌山市の実家でしばらく過ごした後、1902 年から和歌山県南東部にある那智をフィールドにすることを決めます。帰国後の熊楠が那智で見た風景は、イギリスのそれとは全く異なるものでした。キュー・ガーデンはまさにわれわれがイギリスの風景として想像するような、きちんと整備された芝生が広がる庭園ですが、これは人間に支配された自然とも言えます。ところが那智は、手つかずの自然であり、たくさんの生物がひしめき合っているような空間でした。生物学的な見地からすれば、まだほとんど研究されていない場所が、そこにあったわけです。そして、そこに生息する魅力的な生物が、熊楠に自然の重要性を認識させ、やがて神社合祀への反対運動へと駆り立てていきます。

## 神社合祀反対運動

神社合祀とは、複数の神社を一つにまとめてしまうことで、日露戦争後、経済的に追い詰められた明治政府が、神饌幣帛料しんせんへいはくりょうなどの出費を抑えようとして行ったものです。これは特に三重県と和歌山県で激烈に進められたことが分かっています。和歌山では神社合祀が始まる前に5,819社あったものが、最も少なくなったときで442社、10分の1以下になったと言われています。

熊楠は那智を離れて田辺に移った後の1909年9月から、神社合祀に対する反対運動を開始します。きっかけとなったのが、田辺近郊の稲成村（現在は田辺市内）にあった糸田神社です。糸田神社は熊楠のお気に入りのフィールドの一つで、熊楠の旧邸からも歩いて行ける距離にあり、アオウツボホコリという非常に珍しい変形菌の一種を採取した場所でした。この糸田神社が1907年に合祀され、翌年には境内も整理され、アオウツボホコリが採れたタブノキの倒木も処分されてしまうこととなります。これが熊楠を怒らせ、和歌山各地で進む合祀に激烈な反対運動を繰り広げていくことになったのです。

那智の神域で起こった山林開発計画に抵抗して書かれたのが『南方二書』です。これは熊楠が自身のエコロジー思想を展開した文書として有名です。元々は東大にいた植物学者の松村任三に宛てて書かれた書簡で、それを民俗学者の柳田国男が活字に起こして出版しました。その中では、那智をはじめとした紀南の珍しい植物・生物・動物・菌類・藻類などが列挙され、それらが神社林や神林によって保全されてきたことが訴えられています。手紙を書いた相手が植物学者の松村だったため、挙げられている多くは植物ですが、その他の生き物も出てきます。例えばリュウビンタイというシダ植物の一種や、極めて珍しいといわれるヒナノシヤクジョウ、蘚苔類であるクマノチョウジゴケ、そしてルリトラノオ、ミヤマウズラ、ツルコウジ、タニワタリ、オガタマノキ、冬虫夏草、動物ではヤマネ、ヤドカリ、サンショウウオなども登場します。

『南方二書』を通して熊楠は、ある一つの珍しい植物が大切だとか、特定のある場所が重要なのだと言っているのではなく、さまざまな種類の生物があちこちにあり、それを全体として保つことの重要性を訴えていました。それが熊楠の反対運動で顕著に見られる特徴であり、彼の一番訴えたいことでした。全体として自然を捉え、保全することで、個々のものもその中で生き続けていくことができる。何かが無ければたちまち崩れ去って、二度と復元できなくなるかもしれない。当時はちょうどエコロジーという新しい学問分野が出てきたタイミングで、そうした最新の考え方をうまく取り入れ、自分の活動に生かしていった。それが熊楠の優れたところだったと思います。

熊楠の反対運動は、実を結んだものもあれば、失敗に終わったものもありました。うまくいった例としては、那智山の山林伐採を食い止めて保安林への指定に成功した事例や、田辺湾に浮かぶ神島、後に昭和天皇を案内した場所ですが、この神島の森が魚付保安林になった事例も挙げられます。こうした活動を通して地域の自然が保全され、また熊楠が周りの人たちを巻き込んでいくことで、やがて熊楠の活動は地元生根付き、その後の自然愛護・保護運動へとつながっていきます。

熊楠の神社合祀反対運動を、彼が高邁な思想を抱いていたとか、自然保護の精神にあふれていたと捉えるのは少し違うのではないかと感じています。熊楠の反対運動は、むしろごく個人的な理由によるものだったと思われます。糸田神社の例のように、自分のよく知っている、日常的に研究に使っている場所がなくなってしまうのを何とか押しとどめたい、身近なものを守

りたい。それこそが熊楠における自然保護だったのだと私は考えています。

## スペイン風邪と研究の日々

現在、新型コロナウイルスの流行を受け、スペイン風邪に関する記録の掘り起こしが進んでいます。私たち熊楠研究者も、熊楠とスペイン風邪の関係について、田辺の町全体を視野に入れて考えています。その中で明らかになったのが、熊楠をはじめとする南方家の一家全員がスペイン風邪に罹患していたということです。

1918年11月19日の熊楠の日記から、スペイン風邪の被害についての生々しい記録を読み取ることができます。熊楠は生涯にわたって非常にまめに日記をつけ続けました。そのうちの一部は既に公刊されていますし、残りも翻刻(手紙の文字を読み取って活字に起こす作業)が、大勢の研究者やボランティアの手によって進められています。熊楠の日記には、自分の1日の生活について、その日の天気や寒暖、何時に起きて寝たのか、何をしたのか、食べたもの、夢の話、家族の動向、キノコのスケッチ、読書した本、訪問者について、書簡の受発信、本や雑誌が届いたこと、論文の執筆や発送、庭の植物が花開いたこと、飼っている動物たち、つまりネコやイヌやカエルやカメなどのことが詳細に書かれています。その詳細な記述は、スペイン風邪の被害の記録にも及びました。

例えば、熊楠が行きつけにしていた多屋長という店では、家の中に病人が出たために、戸を半分閉じて営業していたそうです。熊楠は、買い物を済ませた後で逃げるように帰っています。また、この日、奥さんのために呼んでいたマッサージ師がスペイン風邪に罹患して来られなくなり、そのことを告げに来たマッサージ師の奥さんに、熊楠が庭で栽培していた安藤蜜柑とネーブルを与えています。多分、これを食べて元気を出しなさいというメッセージだったのだらうと思います。恐ろしいことに、この日だけでも4人もの死者が、熊楠の知っている範囲で出たことが読み取れます。特に医療関係者に死者が相次いでいました。

19日の日記以外にも、当時の田辺の様子が詳細に記録されています。職場や家庭での集団感染も頻発し、田辺郵便局では13人が罹患し手紙の配達を半ばストップしていると書かれています。熊楠は書簡でやり取りし、論考なども郵便で送っていたので、恐らくかなり気にかかる話だったのでしょう。また、当時、田辺からは大阪に働きに出ている人が多かったようで、彼らを通して伝えられる大阪の状況も熊楠の日記から読み取れます。大阪では火葬場がいっぱいで、船にも病死者は積んでくれないので、風呂敷に遺体を包んでこっそり連れ帰ったなど、すさまじい状況だったようです。

熊楠の日記からは、被害状況を個人目から見たリアルなものとして知ることができます。これまで熊楠の日記は、熊楠自身のことを知るためにばかり使われてきましたが、それだけでなく、熊楠の目を通して明治から昭和初期の田辺や和歌山の姿を知ることができるのです。

肝心の熊楠一家の罹患に関しても、紹介しておきたいと思います。まず11月15日頃に熊楠が発症します。鼻水が出る程度で、大して重くはなかったようです。それから、26日に奥さんの松枝さんと娘の文枝さんにも症状が出ます。「文枝は頭痛がするので学校を休んで寝ている」「松枝に移り、喉が痛いといって早く床に入ったので、夜、予が橙(ダイダイ)2個を買ってきて、汁を飲ませた」と書かれています。かつて橙の絞り汁は風邪の特効薬として使われていました。熊楠はあまり家族の世話を焼いたりするような人間ではないのですが、このときは珍しく、かいがいしい姿を見せています。最後に、12月10日に息子の熊弥さんが発症します。恐らく最初に熊楠が家に持ち込み、次々にかかったのだらうと思いますが、4人とも軽症で済

み命に別状がなかったことは、幸運としか言いようがありません。

田辺におけるスペイン風邪の最初の流行は、1919年の春に沈静化します。日記からも、熊楠のほっとした様子が伝わってきます。ところがこの年の冬、12月になると再流行が始まり、翌年3月にはいったん収束しますが、1920年12月から1921年3月にかけて第三波が襲来します。田辺の人たちは、それを力なく受け入れるままだったということは決してなく、防御方法を編み出し抵抗していきました。これについては今年2月に出した『熊楠と幽霊』という本で詳しく語っているので、関心のある方は読んでいただければと思います。

### 熊楠の日記の中の自然

こうした危機的な状況の中で、熊楠がただ怯えて生活していたかということ、そんなことはありません。さきほどとりあげた1918年11月19日の日記には、ひどい状況だというのに併せて、このような記述があります。「午後、ビンの中に飼っているカジカ（カエルの一種）が美しい声で鳴いた。『牟婁新報』と言いながら、小僧さんが配達に来た声を聞いて鳴いたのだ」という記述です。熊楠の日常が、スペイン風邪の流行の中でも確実に継続されており、自然へと目が向けられていたことが分かります。

この頃、熊楠が特に力を入れていたのがマツバランの研究で、日記にも「マツバランの孢子が詰まった孢子嚢が破裂した」といった記述がしばしば現れます。それから、平瀬作五郎との書簡のやり取りが頻繁になされています。マツバランは、ランといっても美しい花を咲かせるラン科の植物ではなく、シダ植物の一種です。茎だけで、葉も根も花もない独特の形状をしています。そのため熊楠の時代には、陸上に現れた最初の植物と考えられており、マツバランの発生過程を研究すれば、植物の進化が明らかにできると期待されていました。

平瀬作五郎は、イチョウ精子の発見者として植物研究の歴史に燦然とその名を輝かせている人物です。熊楠と平瀬は1907年頃に知り合い、やがてマツバランについて共同研究をすることになりました。熊楠が実際の栽培を行い、熊楠から送られてきた標本を顕微鏡観察するのが平瀬の仕事になっていました。南方邸の庭にはマツバランの栽培スペースが設けられ、当初はかなり難航したようですが、1918年頃にはマツバランを安定的に発生させられるようになりました。この研究は結局、第一次大戦中にオーストラリアの植物学者、ダーネル・スミスとローソンに先を越され、世界的発見とはなりませんでしたが、熊楠の取り組みからは、どんな状況下であっても自分の好きなこと、重要だと思ふことを続けることの大切さを教えられます。

さらに、熊楠の日記からは、彼の生活や考え方だけではないものを見出せる可能性があります。日記には花の開花、キノコの発生、毎日の天気といった情報が詰め込まれており、田辺という特定の場所で何十年も定点観測を続けた記録といえます。ここからは、近年話題となっている気候変動についても知ることができるかもしれません。例えば1918年2月4日の日記には「昨日頃より庭中のいろいろな梅の花が咲き始めた」とあります。近年、梅の開花というと12月末くらいではないかと思えますから、100年前はだいぶ遅かったことが分かります。もちろん場所、品種、その年の気候などもあるでしょうから簡単には言えませんが、きちんと研究したら、気候変動に関しても熊楠の日記は第一級の資料となるはずですが。他にも、カジカがいつ鳴き始めたのか、カメが冬眠から覚めたのはいつなのかといったことも、もしかしたら役立つかもしれません。

### 熊楠に倣って生きる



熊楠のように生きるのは難しいかもしれません。社会的にも、家庭的にも、やや問題があるような気がします。けれども熊楠は決して、われわれが想像もつかないようなすごいことをやっていたわけではありません。身近なものを大切に、庭や近所の動植物の観察を続け、それらを毎日のようにきちんと記録する。それは恐らく、やろうと思えば誰にでもできることではないでしょうか。徹底的に、継続的にやること、それが大切です。そうすることで何か見えてくるものがあり、実現できる何事かがあるはずです。皆さんもぜひ、熊楠に倣って生きてみてほしいと思います。

## 質疑応答

(Q) 田辺のスペイン風邪への対策、心持、スタンス等について、今、私たちがコロナ禍の生活を送る上で参考になることがあれば教えてください。

(志村) 一番大切なことは、熊楠が家から出ない人だったということかと思います。基本的にずっと家にいて、そこでできることをやっていました。もちろん誰にでもできることではないと思いますが、一つのスペイン風邪の下での生き方としてご紹介しておきます。

(佐倉) 熊楠日記にはいろいろな情報が含まれていて、単に熊楠が何をしていたかという情報だけでなく、当時の個人の目を通してスペイン風邪という感染症がどういうものに見えていたか、当時の田辺周辺がどうそれに対応したかという、ある種の社会学、民俗学の資料として読み解けるといってお話でした。もう一つ、気候変動などの長期的な記録としても使えるというご指摘もありました。今、地震に関しても過去の資料を自然科学と結び付けて読み解く作業がなされており、そういう意味でとても面白かったです。

お話を伺う限り、熊楠はかなり慎重にスペイン風邪に対応していたように思いました。それが当時の水準だったのか、それとも熊楠個人の特性だったのでしょうか。

(志村) 当時の田辺の状況と比較すると、熊楠は他の人たちよりは慎重で、引きこもりがちだったと思います。田辺の人たちは、流行当初は運動会をするなど油断しているふうがあります。ただ田辺の人たちも、流行が進むにつれて、どんどん対策を進めていくことになります。

●発表資料

花博自然環境助成シンポジウム 2021年8月31日

熊楠から受け継ぐエコロジーの  
思想と未来に向けて

志村 真幸

南方熊楠  
1867～1943年  
現在の和歌山市の出身  
\*熊野の野人ではない  
大学予備門を中退  
アメリカ、イギリスに十数年の遊学  
キュー・ガーデン  
大英博物館  
『ネイチャー』への投稿



多様な顔をもった人物  
生物学研究、人類学・民俗学、比較文化、説話研究  
雑誌・新聞での蘊蓄の提供者、昭和天皇へのご進講

生涯をアマチュア／在野のままで過ごす

「エコロジーの先駆者」  
神社合祀反対運動

エコロジーの先駆者  
1900年  
イギリスから日本に帰国  
和歌山市の実家を経て

1902年～  
那智での生活  
イギリスの自然との差  
人間に管理された空間  
那智の多様で手つかずの自然  
研究すべき生物たち






神社合祀反対運動


神社合祀  
日露戦争後の明治政府による地方改良運動のひとつ  
地域ごとに神社を整理統合  
三重、和歌山で激烈  
和歌山では神社の数が5819社→442社  
熊楠は田辺定住後の1909年9月から反対運動  
神社林・神域の木々の伐採、神社地の転用  
みずからの研究のフィールドが破壊されてしまう  
危機感を覚えて反対運動

反対運動のきっかけのひとつ  
田辺近郊の稲成村の糸田神社  
お気に入りのフィールドのひとつ  
アアウトポホコリを採取  
タブノキの倒木に発生  
1907年に合祀  
翌年に境内も整理されてしまう  
→反対運動へ




那智の山林開発にも猛反対

「南方二書」  
東京帝大の植物学者  
松村任三宛の書簡  
柳田国男によって公刊



紀南の珍しい植物・菌類・藻類  
神社林によって保全

リュウビнтаイ、ヒナノシヤク  
ジョウ、クマノチョウジゴケ、  
ルトラノオ、ミヤマウスラ、  
ツルコウジ、タニワタリ、オガ  
タマノキ、冬虫夏草、ヤマネ、  
ヤドカリ、サンショウウオ……



熊楠の反対運動  
全体として保つことの重要性を強調（特定の種ではなく）  
木々、花、シダ、キノコ、動物たち、土……  
生態系という当時の新しい考え方  
「エコロジーの先駆者」

#### 活動の成果

那智山の山林伐採を食い止め、保安林への指定に成功  
神島の森は、魚付保安林となる

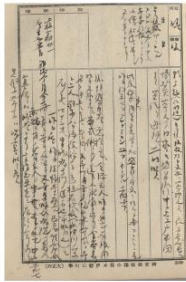
しかし、熊楠が高邁な思想を抱いていた  
自然保護の精神にあふれていた  
とはちょっと考えにくい

むしろ、個人的な理由からの反対  
自分のよく知っている場所、関わりのある神社  
身近なものを守ると意識  
それが熊楠の自然保護だったのではないか

#### スペイン風邪と研究の日々

##### スペイン風邪

1918年11月から田辺でも猛威をふるう  
熊楠一家4人も全員が罹患  
そんななかでの熊楠の生活をのぞいてみたい



1918年11月19日の日記  
スペイン風邪の生々しい記録

生涯にわたって、まめに日記を付  
けつけた熊楠

天気、寒暖、起床時刻、就寝時  
刻、その日にしたこと、キノコの  
観察やスケッチ、読書、訪問者、  
書簡のやりとり、本や雑誌の来着、  
庭の植物の開花、食べたもの、死  
や病気、家族、夢、犬や猫や亀の  
ことなどなど

- ・多屋長という行きつけの店  
病人が出たため、戸を半分閉じて営業  
→熊楠は買いものをすませたあとで逃げるように帰る
- ・マッサージ師を呼んでいたが、罹患したために来ない  
そのことを告げにきた夫人に安藤ミカンとネーブルを与える
- ・死者がこの日の日記だけでも4人  
とくに医療関係者に死者が相次いでいた
- ・葬式にはほとんど会葬者が来ない
- ・言葉も発せないほどの病人が店番、重篤な息子は奥で寝ている

19日以外にも、町の状況が詳細に記録されている

職場・家庭での集団感染も頻発

郵便局では13人が寝こみ、手紙の配達になかばストップ

一家11人が寝こんだ家、7人全員が動けなくなった家

誰かがかかると、たちまち家中に広がった  
「飯を炊くひとすらいなくなった家がある」

大阪に出ていた田辺出身者たちからの情報

病気の妹を見舞いに行った兄が罹患して死亡

6人の子どもたちは何も知らずに遊んでいる

別の場合には、火葬はすぐにはできず、船にも積んでくれないため、  
風呂敷に屍体を包んでこっそり連れ帰った

田辺や紀南での被害状況については、よくわかっていなかった

『牟婁新報』という地方新聞くらい

熊楠日記の価値

被害の実情を、つぶさに知ることができる

これまでは熊楠自身のことを知るためにのみ使われてきた

もっとさまざまな利用法があるはず

#### 熊楠一家の罹患

11月15日頃に熊楠が発症

鼻水が出るなど

26日に妻の松枝と娘の文枝にも症状

「文枝は頭痛がするので、学校を休んで寝ている」

「松枝に伝染り、喉が痛いといって、早く床に入った」

「夜、予が橙二個を買ってきて、汁を飲ませた」

珍しく熊楠が世話を焼く

\*かつては橙が風邪の特効薬とされた

12月10日に息子の熊弥が発熱

4人とも軽症ですみ、命に別状はなかった

最初の流行は1919年の春に沈静化

12月に再流行→翌年3月に収束

1920年12月～1921年3月に第三波

熊楠の油断と不安

一度かかったからもう大丈夫だろう

しかし、再感染の噂を聞く

→何度も喜多幅医師の診察を受ける



#### 熊楠の日記のなかの自然

11月19日の日記

「午後、瓶の中に飼っているカジカ [カエル] が美しい声で鳴いた。『牟婁新報』と言いながら小僧が配達に来た声を聞いて鳴いたのだ」

ただおびえていただけではない

日常も継続

ただ、熊楠は仕事に就いていたわけではないので……

11月20日

「カジカが朝、美声にて一回小さく鳴いた」

「スイッチョ虫二匹がオシロイバナの葉に上り、足を伸ばして伏している。死に瀕しているのだ」

「午後、熊弥を五明楼跡の裏の藪へカラスノゴマをとりに行かせたが、もはや枯れ、莢のみあった。葉はなし」

12月20日

「この日、サンショウウオに大きな蠅を一匹与えると、猫の如く尾を左右にふりながら、久しくかかって食いおわった。このサンショウウオが蠅を食うのはこれで二度目である」

## キノコの研究

11月4日

「午後、キノコの胞子を描いた。わずかに2種の分を描いた。  
[中略] 庭園にて見出した縄に付いていた帽菌 [中略] を記画した。

F. 1472A, *Claudopus*]

11月6日

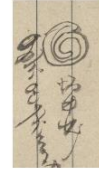
「さきほど毛利のところからの帰途 [で見つけた]、山本吉太郎  
氏邸の表壁の土台石の藓に付いていたキノコを記画した。

×F. 2141, *Rhinotrichia decolorans*, Cooke ?」

## 炭水藻

11月13日

「午後、濱口勝蔵氏が来た。頼  
んでおいた神子浜の小池の水  
(前年、予、藻の奇異なもの、  
蝸牛状の *Ophiocytium* 及び  
*Centritructus*? を見出した) 三  
瓶、ホルマリンを点下したも  
のをくれた」



## マツバランの研究

とくに頻繁に記述があるのはマツバラン

「松葉蘭二顆胞囊破裂す」

+平瀬作五郎との手紙のやりとり

シダ植物の一種 (\*蘭ではない)

茎だけで葉も根もない形状

→もっとも原始的なシダ植物であり、

陸上にあらわれた最初の植物かも?

マツバランの発生過程の研究

→植物の進化が明らかになると期待



平瀬作五郎 (1856-1925)

イチョウ精子の発見者

1907年頃に熊楠と知り合う

→マツバランの共同研究

熊楠が栽培、平瀬が顕微鏡観察

南方邸の庭にマツバランの実験園

スペイン風邪のさなかでも、コッ  
コツと研究をつづける



結局、オーストラリアのダーネ  
ル・スミスとローソンに先を越  
され、世界的発見とはならな  
かった

とはいえ、どんな状況下でも、  
自分の好きなこと、重要だと思  
うことを続ける大切さ



<熊楠日記の利用>

花の開花、キノコの発生、毎日の天気や寒暖などが記録

定点観測されたデータと位置づけられる

1918年 およそ100年前 いまと気候は変化しているのか  
2月4日

「昨日頃より庭中のいろいろな梅の花が咲きはじめた」

現在よりだいぶ遅いのでは?

品種、年、場所などにもよるので、簡単には言えないが  
貴重な資料になるはず

だから、そういった方面から解析してみないか

## 最後に

熊楠のように生きること

は難しいかもしれない

しかし、熊楠はけっして我々が想像も付かないようなことをやっ  
ていたわけではない

身近なものを大切に

庭や近所の動植物の観察

きちんと記録すること

それらをずっと継続する

画像提供

南方熊楠顕彰館

日記の解読には、岡本清造による翻刻を参考にした

## 「天神崎の自然とナショナル・トラスト運動」

公益財団法人天神崎の自然を大切にする会 玉井 済夫

### 吉野熊野国立公園

吉野熊野国立公園は紀伊半島にあり、和歌山県、三重県、奈良県と3県にまたがる地域で、奈良県の大台ヶ原とその山塊、北山川、熊野川、三重県の海岸、和歌山県の海岸、潮岬、そしてアカウミガメが産卵する千里の浜などがあります。天神崎のある田辺湾もその一部で、その海岸地形は非常に複雑で、海底の地形も起伏に富んでいます。湾の前には黒潮の流れが一部、南から北へと流れていて、湾内には暖流が入ってきます。冬は季節風が吹くので、それによって湾内への流入が進められています。この暖流のおかげで、天神崎の磯には時々ヤシの実が流れ着きます。また、水の中にはサンゴ群集、ヤクシマダカラ、ニセクロナマコなど、暖流の生物がたくさん生息しています。

湾の奥には、熊楠が昭和天皇にご進講をした神島があり、熊楠はこの島を大変大事にして国の天然記念物にしました。また、畠島の保全に尽力されたのが、京都大学白浜瀬戸臨海実験所の所長であった時岡隆先生です。時岡先生が大変な苦勞をして観光開発されないように保全して、今では文部科学省が買い上げて生物の実験地になっています。

田辺の人々は、天神崎の海岸の森や磯をいろいろなことに活用してきました。しかし、1974年、その森の山の尾根に沿って、50戸の別荘をつくらうという計画が持ち上がりました。当時ここは県立自然公園だったので、田辺市および和歌山県に、この森を保全してほしいと陳情しましたが、それは難しいと言われたので、やむを得ず市民がこの森を買い、地主となって森を守らうという運動が起こります。それが天神崎のナショナル・トラスト運動の始まりでした。

### 天神崎におけるナショナル・トラスト運動

ナショナル・トラスト運動は、1895年にイギリスで起こった運動です。オクタビア・ヒル、ロバート・ハンター、ハードウィック・ローンズリーの3名が、法律では守りきれない大切なものをみんなで残そうと、寄付金を募り、自然や歴史的遺産を買い取り、皆で学び楽しもうという提案をしたのです。熊楠は1892年にイギリスへ渡り、いろいろな活動を経て、1895年、イギリスでナショナル・トラストが設立した年に大英博物館の非正規職員として勤めることになりました。熊楠は1900年に帰国しますが、イギリスのナショナル・トラスト運動はその後も続き、今年で126年がたちます。

天神崎の自然保護活動を始め、最も熱心に取り組まれたのが外山八郎先生です。当時の田辺商業高等学校（現・神島高等学校）の先生で、市役所、県庁、市民、いろいろな方々に天神崎を大事にしようと呼びかけ、天神崎の自然を大切にする会を作りました。「守る会」ではなく「大切にする会」という名前には、敵から守るのではなく、みんなで大切にしようという、クリスチャンであった外山先生の精神が表れています。

当時、ナショナル・トラスト運動をしている地域が全国で幾つかあり、その全国連合体ができて、第1回の全国大会を田辺第一小学校で開催しました。1984年にはイギリスのナショナル・トラストからローレンス・リッチさんが来てくれて、天神崎の日和山を案内しました。日

和山の頂上から田辺湾を見て、「何と美しい景色だ」とたたえ、「ぜひ守りましょう」と激励してくださいました。南方熊楠邸へもご案内し、当時は文枝さんが元気でおられて、いろいろとお話ししてくれました。

## 日和山の自然

子どもたちは、よく日和山に登ったり散策したりして、森の仕組みを学んでいます。この森にはオオキンカメムシという美しいカメムシがいます。亜熱帯の昆虫で、和歌山県ではこの海岸の森にしかいません。特に冬の間は、これが集団で越冬している珍しい光景も見ることができます。

森にはタブノキやカンコノキがあり、たくさんの落ち葉があります。森では、目に見えない小さな生き物が落ち葉を食べて分解しています。私たちの片足の下に3,000匹いるそうです。ササラダニの仲間が一番多いようですが、落ち葉や落ちた木の枝などを食べて糞をし、それをミミズやカビが食べ、最後に無機栄養となって、雨のときに水と一緒に海へ流れていきます。それが植物プランクトンの栄養になり、植物プランクトンが動物プランクトンや小さい魚の餌となり、海の生態系を支えています。

春は、コバノミツバツツジという美しい花が咲きます。あるいは貴重なムラサキセンブリ、ギンラン、アサギマダラ、モチツツジにナガサキアゲハが来ていたりします。夏の前にはハンゲショウという、葉の一部が真っ白になる植物が水辺に大繁殖します。湿地や淡水の池は、海で生まれたベンケイガニ、アカテガニが過ごす場所にもなります。冬の寒い時期にはセトウチサンショウウオが産卵し、幼生になり、また陸に上がっていきます。これは和歌山県・国の絶滅危惧種に指定された貴重な動物です。湿地では、トンボ類がたくさんヤゴを育てています。また、ヤツガシラという非常に珍しい鳥も時々飛来します。

## 田辺湾の生物たち

天神崎の磯は平らで広いため、人が大勢来てもあまり混雑せず、小さい子どもたちも安心して潮溜まりでいろいろな生物に手で触れることができます。干潮時には、丸山まで水に浸からず歩いて行くことができます。満潮時は丸山は完全に島になりますが、そのときも水に浸からない潮上帯という場所に、アラレタマキビ、イボタマキビという貝がいます。この貝は、不思議なことに水が嫌いなのです。そして、真夏の暑いときには三つ、四つ、五つと互いに乗り上がって暑さをしのいでいます。

子どもたちが喜ぶアメフラシもおなじみの磯の生物ですし、その卵塊のウミゾーメンもあります。タツナミガイは、岩か石か分からないような奇妙な生物で、貝というのに貝殻がありません。貝殻は体の中に退化して、小さくなって埋もれているのです。イソアワモチも不思議な生物で、泥を食べてその中の栄養を吸収し、砂を糞として出すので、泥より糞の方がきれいなのです。海の浄化作用をしている大事な生き物です。他にも、オハグロガキ、ニセクロナマコ、ムラサキクルマナマコなど、暖流の地域に生息するさまざまな生き物が見られます。

常に荒い波が当たる磯の先端、外洋に面したところに、3月頃はヒジキが繁茂します。しかも、水が当たる辺りをよく見ると、ウニが穴を掘って、そこに棲み付いています。たまたま開いている穴に入っているのではなく、ウニが自分で穴を掘って棲んでいるので、どの穴もウニの大きさと同じです。

磯には危険な生物もいます。ヒョウモンダコは小さくてかわいらしいタコなので、手で捕ま

えたくなりませんが、大変危険です。外国では咬まれて死んだ人もいます。棘の鋭いウニ、ガンガゼにも注意しなければいけません。しかし私たちは、子どもたちに「できるだけ生物に自分で触れなさい」「見ているだけでは勉強にならないよ」と言っています。そして、採ってきた生物を寄せ集めて一つ一つ解説して、みんなで共有しています。

## 天神崎の環境保全活動

私たちはこの森と磯と海を、一つの生態系として残したいと考えています。磯の生物を大事にする、それは田辺湾や森の生物ともつながっている。しかも、市街地の近くにあって、みんなが楽しめる。そういうつながりを大切に、運動を進めています。

その中では辛いこともありました。山火事が起きて、寄付金で買った森の一部が焼けてしまったのです。そのときは、市内の高雄中学校や田辺第三小学校の子どもたちが木を植えに来てくれました。他にも、全国から集まった100人の方々、地元の「いちいがしの会」の皆さん、富士ゼロックス株式会社の端数倶楽部の方々が植樹に来てくれました。

年4回、清掃活動も行っています。陸だけでなく、ダイバーの方々に網の袋を持って泳いでいただき、岩に引っかかっている釣りのルアーを回収したり、海底に沈んでいたバイクを引き揚げたこともあります。海の中をきれいにして、サンゴや魚類が生息できる環境を整えています。

野口雨情も大正時代に天神崎に来たことがあり、詩碑があります。そこには「落ちる夕日は天神崎の 遠く海原 ゆふ焼ける」と彫られており、この景色が昔から親しまれていたことが分かります。最近では、潮が満ちてきた夕暮れ時が南米のウユニ塩湖に似ているということで、多くの人々が来て楽しんでいます。

海岸の森の保全を進めるため、土地を買い取り、周囲の自然を保つために、掃除をしたり、木を植えたり、皆さんに自然をよく知っていただくための自然学習に協力し、京阪神からたくさんの学校や団体が来ています。20年、30年と続けて来ている学校もあります。また、絵画展をしたり、機関紙を発行したり、会員を増やして、会の運営を維持していこうとしています。

天神崎の保全活動が始まって47年、現在も土地の買い取りを進めています。運動の始まりのときに日本自然保護協会が買い取った土地、本会が皆さんの寄付金で買い取った土地、寄付してもらった土地、田辺市が和歌山県の助成を得て買い取った土地など、現在では天神崎の森の半分程度が保全地になっています。全国の皆さんのご支援と暖かいご寄付を続けていただいたおかげです。心から感謝を申し上げたいと思います。

## トークセッション

(鷺谷) 皆さまの活動があつてこそ、陸と海の間をつなぐところ、多様な生き物がしっかりと残されているのだということが分かりました。少し蛇足になってしまうかもしれませんが、イギリスのナショナル・トラストの自然環境保全の取り組みについて紹介させていただければと思います。

先ほど玉井様のお話にあつたとおり、イギリスでナショナル・トラストが始まった頃、熊楠は恐らくロンドンに滞在していました。イギリスでは、1899年に自然環境保全を目的とした最初のナショナル・トラスト地が登場しました。このときのトラスト地が、天神崎と同じウェットランド(広義の湿地)である、東イングランドのウィッケン・フ

ェンという所です。富裕な銀行家で自然史に深い興味を持っていたチャールズ・ロスチャイルドが、0.8haの土地を購入してナショナル・トラストに寄付したのが始まりです。その後50回以上、何度も土地を買い足して、今では1,000倍以上、930haの湿地をトラストが管理していて、他の自然保護区になっている多数のフェンと合わせて、国家プロジェクトとして「グレート・フェン・プロジェクト」を実施しています。

この930haの湿地には、8000種もの多様な動植物が生息しています。保護区においては土地の管理方針と計画の実行が科学に支えられることも必要で、ウィッケン・フェンではケンブリッジ大学の生態学をはじめとする関連分野の研究者たちが100年近く関わっています。湿地の維持というのはなかなか大変で、天神崎は条件的にとっても恵まれています。ウィッケン・フェンは内陸の湿地なので、風車を使って水を入れたりしていますが、どうやって質のいい水を導入するか、水循環の研究者なども頭を悩ませているようです。

トラストの運動というのは、自然の変化を見ながら長期にわたって続けていくことが必要だと思いますが、50年近い実績もあり、土地も増やし、多くの子どもたちがそこで自然環境を学ぶなど、とても上手に活用していらっしゃると思います。これからもぜひ活動を発展させていただければと思います。

(玉井) イギリスでは、ナショナル・トラストという一つの団体が全国のいろいろな貴重な場所や建物を取得していますが、日本の場合は、各地域がそれぞれ頑張っています。国の方で、例えば環境省などでうまくまとめていただくとか、国の法律で活動をうまく促進していただけるようお願いしたいと思っています。

(鷺谷) そうですね。いろいろな主体が関わって、地域の自然を大事にしていくことが重要だと思います。手法としては、国立公園の指定、トラスト、あるいは自然再生推進法に基づく自然再生など、いろいろあると思います。田辺市での取り組みを一つのモデルとしてアピールしていただいて、活動がより活発になるよう国の政策の中にもしっかりと位置付けられるといいかもしれませんね。

(玉井) 機会がありましたら、またよろしくお願いたします。



● 発表資料

！皆さん よこそ天神崎へ！

「天神崎の自然とナショナル・トラスト運動」  
～森を守り、海を生かす～



2021年8月31日  
公益財団法人天神崎の自然を大切にする会




大台ヶ原

吉野熊野国立公園

拡張2015年9月

・複雑な海岸地形、複雑な海底地形  
・黒潮に乗ってきた南の生物  
・海岸林＝魚付林・磯・海の生物に大切

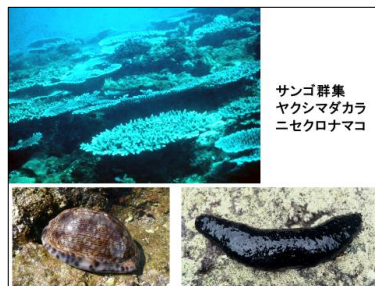


天神崎

田辺市

田辺湾

島島(時岡隆)



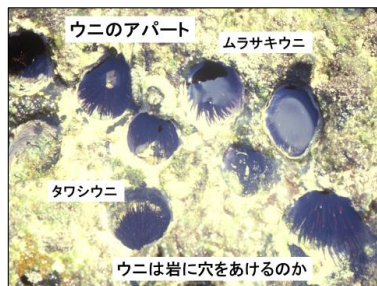
ナショナル・トラスト運動  
～イギリスで起きた運動(1895年)～

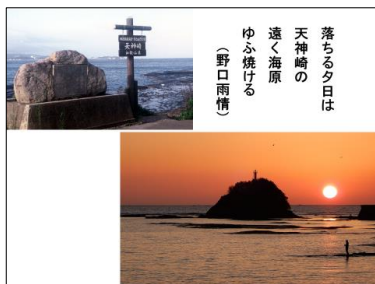
- (1) 3人の提案  
オクタビア・ヒル ロバート・ハンター  
ハードウィック・ローズリー
- (2) 大切なものを残そう  
自然や歴史財産
- (3) みんなの寄付金で買い取ろう
- (4) みんなで学びましょう

	南方熊楠	(英国) ナショナル・トラスト
1892年	フロリダから英国へ	
1895年	大英博物館の職員	3名で設立 オクタビア・ヒル ロバート・ハンター ハードウィック・ローズリー
1900年	帰国	
2021年		設立後 126年

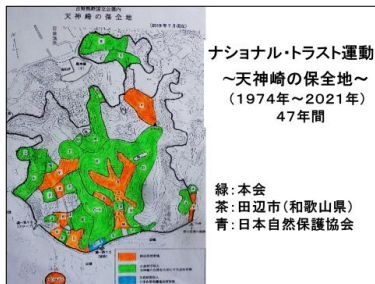








- 天神崎の保全活動
- 1 海岸の森の保全をすすめる  
(土地の買い取り)
  - 2 自然を保つ・・・清掃・植樹
  - 3 各種の活動  
自然観察・自然学習へ協力  
絵画展・機関紙発行・支援活動など
  - 4 会員を増やそう



子どもたちのため  
! 未来のため!  
皆様のご支援のおかげで  
47年の間 頑張ってきました  
心から感謝申し上げます

ありがとう ありがとう

完

## 「田辺・南方熊楠翻字の会」活動紹介

田辺・南方熊楠翻字の会 土永 知子

### 田辺・南方熊楠翻字の会の発足

田辺・南方熊楠翻字の会は、手書きされた文字を現代の活字にする活動を行っている団体です。翻字しているのは、南方熊楠の手書きの資料です。昭和62年（1987年）に田辺市で南方熊楠邸保存顕彰会が発足し、平成4年（1992年）から南方熊楠資料研究会が、熊楠の資料調査を開始します。熊楠は膨大な量の書簡や日記、抜書、資料への書き込みなどを残していますが、熊楠の字は大変癖が強く、読み下せる人が少ないことが資料調査を進める上で大きな課題になっていました。そこで平成11年（1999年）、南方熊楠邸保存顕彰会と南方熊楠資料研究会が協働して、顕彰会の雑誌「熊楠ワークス」に、翻字の会への参加者募集の記事を載せたのが、当会の始まりです。

第1回の会は2000年1月に行われました。当時は南方熊楠顕彰館はまだなかったため、田辺市民総合センターで行いました。熊楠研究者としてたくさんの熊楠の書簡や日記を解説されていた地元高校の国語の先生であった中瀬喜陽氏や、紀南文化財研究会会長の杉中浩一郎氏を講師として招き、参加者は18名でした。まずは八坂書房が活字化して出版した日記と原本のコピーを見比べて、熊楠の字の癖をつかむことから始め、将来的には独自で未解説文を解説できるようにすることを目指しました。

発会に当たっての申し合わせ事項として、幾つかのことを決めました。まず、本会の解説作業はボランティアによる参加で行うため、旅費や謝金などは出さないこと。また、未発表資料が含まれるので、会員が知り得た情報は個人では発表せず、「熊楠ワークス」や「熊楠研究」という関連団体の刊行物に優先して発表すること。そして、これらを守れない人には脱会してもらうということです。

この会を発足した中瀬喜陽氏は、この意義を「熊楠研究 第6号」に次のように書いています。「地方に住み、地方のことを知った人でなければ正確を期し難い難字、難読の地名、人名など」を読み取るために、地元の人も参加した「協働の作業」を目指すということです。発足から21年、251回もの会を積み重ねてきました。最初は会員が18名いましたが、他界された方もあり、現在は9名で活動しています。中学生のときに興味を持って入ってくれた高校生、熊楠ファンで大学生のときから参加して、大学を卒業して地元に戻って就職して、また再開してくれているという若者からシニアまで、幅広い年代層で活動しています。田辺の在住者が約半数、県内、大阪からも熱烈なファンの方が毎回参加してくださっています。現在は、熊楠顕彰館の学習室や市民総合センターで開催しています。

### 翻字の会の成果

会ではまず宿題が出ます。前の月に事務局が課題をプリントして、全員に割り当てます。それを各自予習して、事務局に提出します。当日は各自が割り当て部分を発表して、全員で気が付いたことを教え合います。後日、よく読める人が確認して翻字を完成させます。事務局はそれを活字にして、1年分まとまったら仮綴製本をして、顕彰館に配架します。これを繰り返す

ています。

熊楠の日記には、さまざまなことが書かれています。天気や寒暖、手紙の受発信の記録、そして本文には小さな字で熊楠自身の行動が書かれていて、さらに横書きの文字や、スケッチも描かれていたりします。例えば大正2年(1913年)6月8日、熊楠が47歳の頃の日記には、「朝文枝下駄気に入らぬといひ大になき、足にて台所の床横の板をたゝく。其音で予眼さむ。又臥し十一時起。午後楠本松蔵氏来る。長話して去る。夕又来り、松枝床久米で借来れる巡礼札を模してくれるが、不成。それより十時過迄長話して去る。十二月の廓歌おしえくれる。同氏妾より口授し、控え置し所也。十一時湯に之、帰て高木氏へ状認む。三時頃臥す。」とあります。

その隣に「n.」という不明の文字があり、これは文枝さんと結婚してから毎日書かれています。キリル文字という文字だそうで、二人のプライベートな内容を毎日書いて記録をしているわけです。でも、これは八坂書房版には掲載されていません。恐らくプライバシーに配慮して、活字にはしなかったのだと思われます。

その横には、横文字で本の注文のメモがあります。Dennett『Notes in the Folklore of the Fjort』、Callawayの『Sketches of kafir life』、Cameronの『Across Africa』、いずれも民俗学関係の本を発注しています。本のリストの最後に「6s」「2s」「4s」と書いてあり、私は最初「5」と読んでいたのですが、当時翻字の会に参加されていた、海外生活の長かった高齢の方から、「これはs、シリングの略だよ」と教えていただきました。

田上の発信の欄には「Dunlop ハー」と書いてあり、はがきを1枚Dunlopさんに送ったという意味です。その中でこういう図書の購入を頼んだということです。また、岡村周諦という同郷の苔の研究者に2種類の苔を送ったと書いてあり、その苔のスケッチも描かれています。受信の欄にも、Dunlopさんからはがきが来た、裳華房から植物学雑誌の5月分を受け取ったといった細かなことが書かれています。

熊楠の日記は難読・難解です。癖が強く、異字体の漢字があります。句読点はないし、片仮名や英語が入っているし、学名も入っているし、内容が多分野にわたっていて、大変断片的なのです。天候や熊楠の行動、家族の様子、手紙のやりとりは大体いつも書いてあり、さらに新聞の切り抜きが挟まっていたり、当時の人々や生活に関する貴重な資料が詰まっています。それから、身近な生物の観察記録です。志村先生の話にもあったように、開花記録などがきちんと書いてあるので、これは活用できると思います。フィールドノートとしての役割も果たしていて、スケッチや採集した標本のメモ、それから熊楠はリスト魔で何でも書き上げる性質があり、リストや集計が書いてあったりします。これを熊楠は18歳のときから56年間ずっと書き続けているのです。ですから、日記は熊楠を理解するための貴重な基礎資料であることは間違いありません。田辺翻字の会では、これを翻字・記録して公開し、複数の目で見てより正確なものにしていく必要があると考えて活動しています。

熊楠日記の翻刻は、大正2年(1913年)までの分は既に八坂書房から刊行されています。大正3~12年(1914~1923年)は娘婿の岡本清造氏が翻刻し、それを顕彰館初代館長の中瀬喜陽氏が補訂するという形で綴じたものが残されています。残りの部分に関しては、三つの翻字の会が同時期に発足し、作業しています。田辺の会は大正8~9年(1919~1920年)、大正13~14年(1924~1925年)、昭和6~11年(1931~1936年)の分を翻字しており、現在昭和12年(1937年)の分を作業中で、昭和13年(1938年)の分も作業予定です。飯倉先生を中心にやっておられた東京の翻字の会は、ご進講があった前後の昭和4~5年と最晩年の頃をやっ

ていただき、熊楠関西は大正 14 年～昭和 3 年（1925～1928 年）、熊楠が長男の病気のことを家族に見られないよう英語を交えて日記を書いていた時期を翻字して、一部が刊行されています。2020 年には「南方熊楠日記翻刻連絡協議会」が発足し、翻字資料の統合、共有、公開を目指しています。

## 今後の活動目標

今後も毎月 1 回、土曜の午後に日記の翻刻作業を続けていこうと思っています。翻刻した資料は公開・出版もしていきたいと考えていますが、日記というのは個人情報のかたまりなので、内容に関しては十分な配慮が必要です。分かった内容、庭の様子や熊楠の日々の様子は、顕彰館の展示に生かせるよう協力していきたいと思っています。今、国立国会図書館の「ジャパンサーチ」に日記のデジタルデータを出しているのでも、それに翻刻のデータを付け加えればうまく連携できるのではないかと考えています。そのようにして翻字の成果を利用しやすく発信したいと考えています。さらに、後進を育成する必要があるということも感じています。

南方熊楠邸保存顕彰会は、2005 年に南方熊楠顕彰会に改称し、2006 年に熊楠邸の隣に顕彰館を開館しました。現在は展示施設として、小中学生にも分かるような易しい内容に展示替えをして公開しています。中には 80 人が座れる学習室もあり、音響機器などが備えられており、翻字の会もここで開催しています。約 2 万 5000 点に及ぶ熊楠の資料はいつでも閲覧できるようデータベース化を進めており、書架の引き出しには日記や書簡などの自筆資料が大切に保管されています。熊楠の人となりやエコロジストとしての熊楠の世界への理解を深められるよう、月例展や特別企画展、講演会を開催しています。

南方熊楠邸は、2000 年に田辺市に遺贈され、2006 年から一般公開しています。居室や書斎など、熊楠が実際に 74 歳まで過ごした自宅の様子を見させていただくことができます。ぜひお越しただけたらと思います。

## トークセッション

(佐倉) 2000 年に第 1 回を開催してから 20 年以上ボランティアでやってこられたというのは、このせちがらい今世の中で、そのこと自体が驚きでした。その背景には皆さんの熱意や熊楠への愛などいろいろあるのだと思いますが、なぜこんなに続いているのでしょうか。

(土永) やはり面白いからです。日記などを読んでいくと、懐かしい昭和初期の話や地元民には身近な地名・人名が出てきて、それを熊楠がどのように思っていたのかを知るのが楽しいから、みんな集まってくるのだと思います。

(佐倉) 熊楠自身、大学や研究所に所属するのではなく、在野の人として田辺で活動して、地域の自然保護など地元密着型の活動をされた方だと思うのですが、土永さんたちの会はそういう意味で熊楠の活動の強みの部分をうまくなぞっていると感じました。関西や東京の翻字の会とも連絡しながらやっているというお話がありましたが、東京や関西に比べると地の利みたいなものも結構あるのでしょうか。

(土永) はい。例えば熊楠は保護運動のために近露まで歩いて行ったりしているのです。もちろん自動車も最大限使っていますが、最後は歩いて行った、その距離感や守りたかったものの実感というのは、やはり地元の者は大変よく分かります。

(佐倉) 肌で感じるということですね。そういう情報は東京の方とも言葉では共有はしていらっしゃるんですか。

(土永) はい。顕彰館で「熊楠を訪ねて」という企画を何回か開催して、現地へ見学に行ったりしています。

(佐倉) なるほど。各地域でネットワークがつくられて、それを地元が牽引するという形ですね。理想的かもしれないですね。

熊楠は本当に日記魔で、一つの日記の中身もそうですが、あれを56年間、10代から死ぬまで毎日つけていたというのは普通の人感覚では考えられないことですが、志村先生のご著書の中で、熊楠はむしろインプットが圧倒的に多かった人だと強調されていました。あれだけのアウトプットがあり、さらにそれを上回るインプットがあったと知ってもっとびっくりしました。何が熊楠をして、あれだけの日記や記録をつけさせたのでしょうか。

(土永) 恐らくインプットしてくる情報が膨大にあって、そのまま置いておくと何の脈絡もなく積み重なっていただけなので、日記をデータベースのような感じで捉えていたのではないのでしょうか。自分の行動記録、発信記録、入手した本や見たものなど、その記憶や知識をたどる際のキーとして、書き続けていたのではないかと思います。もしなくしたらパニックになったでしょうね。

(佐倉) 自分の頭の中には全部覚えておけないから、外部記憶装置のような感じで保存していたと。最近はコンピュータで日常を記録することが簡単にできるようになってきて、それこそインスタグラムに食べ物の写真などを上げたりしていますが、そういうものの走りのような感じですね。

(土永) そうですね。今、熊楠がインスタを使っていたらすごいことになったと思います。

(佐倉) ある意味、時代の感覚を先取りしていたのかもしれないですね。まだまだお聞きしたいこともあります。ぜひそちらに実際にお伺いしたいとも思っているので続きはそのときにお聞かせいただきたいと思います。ありがとうございました。





### 熊楠の日記は **難読・難解**

- ・くせが強い漢字に異字体 句読点なし カタカナ 英語 学名
  - ・内容が多分野にわたり、断片的
  - 天候、熊楠の行動記録 起床、就寝、入浴、来客、子供の様子
  - 生物の観察記録、手紙のやりとり (交流記録)
  - \* 熊楠のフィールドノートを兼ねている(標本記録・集計・メモ)
  - \* 当時の生物や人々の生活に関する貴重な資料
  - \* 1885年(18歳)から1941年(74歳)没年まで56年間書き続けている
- 熊楠を理解するための重要な基礎資料**
- 翻訳したものを記録して公開し、複数の目で見てより正確なものにしていく必要がある。**

### 田辺翻字の会の成果

1919(大正8)年  
1920(大正9)年  
1924(大正13)年  
1925(大正14)年7月まで

1931(昭和6)年  
1932(昭和7)年  
1933(昭和8)年  
1934(昭和9)年  
1935(昭和10)年  
1936(昭和11)年  
1937(昭和12)年12月まで



仮綴製本して  
南方熊楠顕彰館内に配架

### 南方熊楠日記翻刻の状況

(南方熊楠顕彰会会報誌『熊楠ワークス第57号より』)

長谷川興蔵編『南方熊楠日記』全4巻刊行  
1885～1913年(熊楠18歳～46歳)

熊楠日記56年分の半分28年分は刊行

大正時代の一部を娘婿岡本清造氏が翻刻

南方熊楠顕彰館初代館長中瀬嘉陽氏補訂

3つの翻字の会が作業中

・東京・南方熊楠翻字の会1999年～

・田辺・南方熊楠翻字の会2000年～

・熊楠関西2001年～

2020年

「南方熊楠日記翻刻連絡協議会」発足

翻字資料の統合、共有、公開をめざす

年次	熊楠日記の翻刻状況	出版状況
1913(大正2)	1885年～1913年	八重書房刊行
1914(大正3)	同年長・中東氏	
1915(大正4)	同年長・中東氏	
1916(大正5)	同年長・中東氏	
1917(大正6)	同年長・中東氏	
1918(大正7)	同年長・中東氏	
1919(大正8)	同年長・中東氏	熊楠研究で刊行
1920(大正9)	同年長・中東氏	
1921(大正10)	同年長・中東氏	
1922(大正11)	同年長・中東氏	
1923(大正12)	同年長・中東氏	
1924(大正13)	田辺氏まで	熊楠研究から
1925(大正14)	熊楠研究から	
1926(昭和元)	熊楠研究から	
1927(昭和元)	熊楠研究から	
1928(昭和元)	熊楠研究から	
1929(昭和元)	熊楠研究から	
1930(昭和元)	熊楠研究から	
1931(昭和元)	熊楠研究から	
1932(昭和元)	熊楠研究から	
1933(昭和元)	熊楠研究から	
1934(昭和元)	熊楠研究から	
1935(昭和元)	熊楠研究から	
1936(昭和元)	熊楠研究から	
1937(昭和元)	熊楠研究から	
1938(昭和元)	熊楠研究から	
1939(昭和元)	熊楠研究から	
1940(昭和元)	熊楠研究から	
1941(昭和元)	熊楠研究から	

### 「田辺・南方熊楠翻字の会」の今後の活動目標

#### 毎月1回 土曜の午後、日記の翻刻作業

▶資料の公開・出版 (大正8年分は『熊楠研究』6・7・8号で刊行)

(日記は個人情報なので十分な配慮が必要)

▶顕彰館の展示への協力

▶国立国会図書館「ジャパンサーチ」のデジタルアーカイブと連携

▶翻字の成果を利用しやすく発信する

▶後進の育成

### 南方熊楠邸保存顕彰会は 2005年南方熊楠顕彰会に改称 南方熊楠顕彰館 2006年開館



熊楠研究の拠点・情報発信・学習室の活用



熊楠の人となりや、エコロジストとしての熊楠の世界の理解を深めることができるよう月例展、特別企画展、各種講演会を開催し、翻字の会の活動もできる「学習室」がある。



約25,000点に及ぶ資料は、いつでも閲覧できるようにデータベース化を進めている。  
下段の引き出しに、日記、書簡、抜書等の自筆資料等が納められている。

### 南方熊楠邸 2000年田辺市に遺贈 2015(平成27)年国登録有形文化財 2006年から一般公開



1916(大正5)年～1941(昭和16)年享年74歳まで25年間ここで過ごした。



資料はすべて  
南方熊楠顕彰館提供

発表に関して、本会会員のご協力をいただきました。  
御聴講ありがとうございました。

## 番所山を愛する会の活動報告

番所山を愛する会・南方熊楠記念館学術スタッフ 三村 宜敬

### はじめに

番所山を愛する会は、昨年度、花博記念協会の助成事業として「白山町番所山に桔梗平を復活させよう」という緑地化事業を行いました。今日はこの事業に関することと、紀の国森づくり基金活用事業であり環境省の吉野熊野国立公園パートナーシップイベント「番所山の森林探検」として行っている森林観察会、粘菌観察会、昆虫の観察会の様子をご紹介します。

### 花博自然環境助成事業「白山町番所山に桔梗平を復活させよう」

番所山は南方熊楠記念館のある所で、その名の通り、かつては紀伊水道を通る異国の船を監視するために番所が置かれていました。現在も灯台が残っていますし、近くには円月島や、海水浴でにぎわう白良浜、江津良浜などがあり、記念館の屋上からは、天神崎も神島も見ることができます。ここは江戸時代には松林があり、そこにキキョウが咲いていたことから「桔梗平」と呼ばれていました。しかし、現在は松が枯れてウバメガシ、モッコク、クスノキが大きくなり照葉樹木の二次林となっており、一部に裸地も残されていることから、その裸地に郷土種であるキキョウを植栽して桔梗平を再現し、景観を保全しようというのが、今回の緑地化事業の目的です。

緑化計画地としたのは5m×12m×10m×6mの四角い平地で、かつてはレストランがあったり、南方熊楠記念館の新館を建設する際に工事事務所が建てられたりしていました。新館建設が終わった後、工事事務所跡地にいったんガザニアを植えたようなのですが、これは定着しなかったようで、土地改良から行うことにしました。

まずは重機で地面を掘り起こして整地をし、バーク堆肥を混ぜました。大きな礫を取り除く作業は、番所山を愛する会のメンバーが協力して行いました。大きな石は投棄するのではなく、緑地化する土地の周囲に垣として配置しました。そして植栽をしていくのですが、キキョウの他にハマカズラも植えました。ハマカズラというのは熊楠が神島を天然記念物に申請するときに、和歌山県が北限となる貴重な植物であると紹介しています。また、昔は熊野詣をする人が、このハマカズラの種で作った数珠を持っていくとご利益があるという習俗もあったそうで、この地にゆかりの深い植物ということで、120苗ぐらいを作って植栽しました。ハマカズラ種子は非常に硬いので、傷を付けて発芽させ、苗に育てました。

また、県の木であるウメバガシも植えました。これは、地元の小学生が竹筒に植えて育てた苗を、西牟婁郡の振興局の「ドングリバンク」を利用して100本譲り受けたものです。竹筒を割って、堆肥を入れた土に植え付け、その苗を守るように竹筒を伏せて置いておきます。その他にもいろいろな植物を植えており、ヤマモモやシャリンバイも植えたのですが、現在かなり元気がなくなってきました。7月上旬ぐらいからキキョウが開花し、クレオメは盛夏まで咲き続け、種ができました。

令和2年(2020年)は順調に進み、今年、令和3年(2021年)4月には非常に多くのクローバーが生えていました。キキョウを覆い尽くすほど勢力が強くなってしまったのですが、ク

ローバーは土壌の窒素を固定するので、ある程度はそのままにしておこうということで、キキョウの周囲だけ刈り取って、キキョウが定着しなかった箇所は残しておくことにしました。定着したキキョウやウバメガシには肥料を与えて、現在も花が咲き誇っており、またクローバーやススキの勢力も伸びてきてはいるのですが、徐々に緑地化が進んでいる感じがします。

工事事務所跡地の脇にも 100 株ほどハカマカズラを植えました。特に緑化計画地の側溝の近くに植えた分は、この通路に入ってきた車にひかれてしまうようで、今のところ 2 株だけが残っています。ただ、先日、草刈りをしてくれた方が誤って刈り飛ばしてしまい、無残な姿になってしまいました。ここからどう成長してくれるか楽しみではありますが、ここにハカマカズラがあるということを知りやすく PR する必要があるなど考えています。

## 番所山の森林探検

当会では「番所山の森林探検」として、南方熊楠記念館周囲の番所山を使った森林・粘菌・昆虫などの各種観察会も開催しています。令和 2 年（2022 年）はコロナ禍のため粘菌観察会は中止したのですが、昆虫観察会と森林ウォークは回数を増やしました。番所山を愛する会のスタッフの他、外部講師として特に県立自然博物館の先生や南紀熊野ジオパークガイドの方々に来ていただいて、解説もしていただいています。令和 3 年（2021 年）8 月までに粘菌観察会を 2 回、昆虫観察会を 1 回、森林ウォークを 2 回開催しました。森林ウォークは一度、雷注意報が出たために危険回避の意味で中止になったのですが、今後、11 月までに 4 回は森林ウォークを実施する予定で、直近では 9 月 5 日に実施予定です。

森林ウォークは、大体 10 時ごろに始まって 12 時ごろに終わるのですが、江津良浜方面に行くものと白良浜方面に行くものがあります。南方熊楠記念館の館長が最初の挨拶をして、番所山にある灯台を見に行ったり、ジオパークガイドの方からセンダンの木をはじめとする番所山の植生を紹介し、そうした植物がどういう土地にいるのかを説明していただきます。例えばアコウは「絞め殺しの木」という物騒な異名を持つ木ですが、番所山にはこうした南方系の植物が多くあり、参加者の方々には結構驚かれます。また、この辺りはかつて植物園があり、その際に移植された南方系の珍しい植物も見ることができます。こうした歴史も踏まえて、ジオパークガイドの方と共に説明し、現在どうしてこういう植生になっているのかということを知ってもらおうとしています。

さらに記念館の真下にある天然橋にも行きます。波などの浸食によって削られてアーチ状になったところなのですが、見るところによるとどうもクラックが入ってきているので、万が一ということもあるようです。そんなことになってしまうと残念なのですが。

粘菌観察会は、和歌山県立自然博物館学芸員の川上先生と和歌山信愛女子短期大学の山東先生に来ていただいて、6 月に 2 回実施しました。記念館の前に階段の道があり、そこに落ち葉がたまっています。そこを大きなピンセットでガサガサと漁って、粘菌らしきものを見つけたら先生方に見ていただいて、「これは粘菌です」「カビです」「キノコです」と判断してもらいます。粘菌観察会は子どもの参加者がとても多く、先生方と対等に話ができるほど知識を持っている子も来たりして、私も非常に面白い経験をさせていただきました。

採集した粘菌は室内に持ち帰り、顕微鏡で拡大して見たり、お菓子の箱などにボンドで粘菌が付いた落ち葉を固定して、オリジナルの標本作りをしたりします。さらに、先生方からウツボホコリ、マメホコリ、ジクホコリといった名前を同定してもらい、1 回の会で 10 種ぐらいの粘菌を見つけることができました。熊楠が発見したアオウツボホコリの仲間、キウツボホコ

リなども見つかりました。番所山は自然豊かなので、粘菌類も非常に豊富なのです。

昆虫観察会は、元和歌山県立自然博物館の的場先生や田辺ふるさと自然センターの藤五先生に講師に来ていただいて7月に1回実施しました。記念館の方で貸し出し用の網も用意していましたが、使い慣れた自分の網を持ってくる気合いの入った子も多く参加していました。今回はコロナ禍でもあり、番所山周辺を全員でぞろぞろ行くと虫も捕まえにくいだろうということで、的場先生、藤五先生の2チームに分かれ、それぞれ別の方向へ歩いて行って、昆虫観察をしました。昆虫を捕まえて、粘菌観察会と同じように先生方に同定してもらいます。ベンケイガニやトンボ、チョウなど、それぞれの子どもがいろいろな昆虫を捕まえていました。的場先生が、葉っぱの裏に付いていた卵を見せて「何だか分かる？」と聞くと、瞬時に「ゴキブリの卵！」と答えられるような子もいました。こういう植生の中にどういった虫が来るのかという話もしていただき、番所山の特徴を体験しながら知ってもらえたのではないかと思います。

### 番所山を愛する会の今後の活動

今後の活動としては、工事事務所跡地の緑地化が定着するよう推進していきます。また、観察会などを通じた環境への理解を深める活動を継続し、南方熊楠記念館と番所山という立地を生かした自然環境保全についてPRを行っていきます。SNSや行事を利用して、熊楠の唱えたエコロジー思想と自然との共生を発信していきたいと考えています。

### トークセッション

(丸山) 工事事務所跡地の緑地については、ガザニアが増えなくて良かったなと思います。緑化というのはいろいろなやり方がありますが、私自身は在来種が復活するのが良いと思っているのです。植生が回復するには短期・中期・長期と、幾つかの段階で考えていく必要があると思います。例えば桔梗平を復活させるには、日光がずっと直接当たるのではなく、やはり樹木が育って、その下にできる日陰も要るのかなと思います。土壤改良で取り除いた石をちゃんと石垣に使われていたのは素晴らしいことだと思いました。元々あったものはそこで使うというのが基本で、それを外に持っていくのはまた問題もあるでしょう。

こういう運動は、試行錯誤だと思うのですが、本来こうした荒地を放っておくと、母樹が近くにあればマツが生えてきます。マツは垂直に根を伸ばす性質があり、ポットで苗を育てると、伸びてきた直根を切って植えないといけないので、木としてはあまり丈夫でなくなります。だから、一番良いのは自然に種が飛んできて植わっていくことだと思います。この辺は海岸に自然植生でウバメガシがずっとあるのでそれも一つの可能性ではありますが、強い日差しにも耐えるということを考えると、まずはクロマツだと思います。

クレオメは定着しなかったということですが、これは外来種なので、それでよかったのではないのでしょうか。クローバーも実は外来種ですが、今や牧草として全国にあり、遷移の途中だと思いますので、これは生かして、その中から樹木類、マツやウバメガシなどを少しずつ大きくしてやるという手法がいいのではないかと思います。活動に参加した子どもたちが高校生や大学生になる頃、ちょっとした森になるかもしれないという

くらい、時間のかかることです。参加してくれる小学生というのは、地域の子どもたちですか。

(三村) 昆虫観察会は田辺市や上富田、白浜など近くからの子が多いですが、粘菌観察会は和歌山市、大阪、さらには東京などかなり遠くからも粘菌ファンが来ていて、地元の参加者は2割ぐらいということもあります。

(丸山) 花博記念協会の中にも粘菌を趣味にしている方がおられますが、熊楠の粘菌は人気があるのですね。植生の回復のワークショップの方は失敗してもよくて、最初は駄目でも、では次はどうするというのを何度もやって、10年、15年たって最終的に回復するという話かなと思っています。むしろ植物園があった所の植物はどうされるのでしょうか。これは難しい問題ですよ。

(三村) そうですね。昆虫観察会のおきにも話題になったのですが、植物園の名残の植物があるせいで、地元の虫が集まって来にくくなっていて、逆に緑地化を進めている土地にはそういう昆虫たちがすごく集まってきているのです。ですから、先生方からもそちらの方も緑地化のように何かしていければいいねという指摘は受けています。

(丸山) そのとおりだと思います。在来種でないものが幅を利かせると、例えば孟宗竹などはびこって山の植生を変えてしまうような事例もあります。自然というのは、そんなに簡単に人間の言うことを聞いてくれるものではないので、失敗を繰り返してもいいから、自由な発想で、ずっとこの活動を続けていただきたいと思います。

花博自然環境助成シンポジウム  
「藍橋から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて」  
令和3年8月31日 於南方熊楠顕彰館

# 番所山を愛する会の活動報告

番所山を愛する会 三村宜敬  
(南方熊楠記念館学術スタッフ)

## 番所山を愛する会の活動

- ▶ 緑地化事業 → 令和2年度 花博自然環境助成事業 採択  
「白浜町番所山に桔梗平を復活させよう」
- ▶ 森林観察会
- ▶ 粘菌観察会
- ▶ 昆虫観察会

紀の国森づくり基金活用事業  
環境省吉野熊野国立公園パートナーシップイベント

令和2年度 花博自然環境助成事業 採択  
「白浜町番所山に桔梗平を復活させよう」

番所山は、江戸時代には松林があり、キキョウが咲いていたことから「桔梗平」とよばれていた。

一部に裸地も残されている。その裸地に在来種（郷土種）を播栽して桔梗平を再現し、景観を保全する。

4辺が約5m、1.2m、1.0m、6mの四角い平地  
Googleマップより

2019年（平成31）当時の南方熊楠記念館工事事務所跡地

カゲニアを植えたが定着しなかった

重機で地面を掘り起こし整地。パーク堆肥を混ぜる。

大きな石は取り除いた

石を取り除く作業は、番所山を愛する会のメンバーが協力した。

発芽したハハマカスラ

昨年蒔いて作ったキキョウの苗

地元の小学生が竹筒に育てた苗を、熊楠記念館からボランティアの皆さんが受け取った。

ウバメガシを植える。

竹筒を割って植え付け。竹は苗の近くに伏せ乾燥を予防した

ポットから取り出したウバメガシの苗を植えた。

ヤマモモとシヤリンバイは枯れずに蔓を越した

クレオメは盛夏まで咲き続け、順に種子ができた。

7月上旬からキキョウ開花

令和3年（2021）4月

クレオメは定着せず。4月にクローバーが残り、キキョウがどこにあるのかわかりにくい成長。

クローバーは土壌の窒素を固定することから、土壌を肥やすため桔梗の周囲一部のみ刈り取りを行った。またキキョウ・ウバメガシなどには肥料を与えた。



### 森林探検

- ▶ 2020年（令和2）は、コロナ禍のため、粘菌観察会を中止し、昆虫観察会・森林ウォークを行った。
- ▶ 講師：外部講師、南紀熊野ジオパークガイド、南方熊楠記念館スタッフ
- ▶ 2021年（令和3）は、8月までに粘菌観察会 2回、昆虫観察会 1回、森林ウォーク 2回を実施している。

### 森林ウォーク

- ▶ 講師：南紀熊野ジオパークガイド、南方熊楠記念館スタッフ
- ▶ 7月11日、8月22日 実施済
- ▶ 9月5日、10月17日、11月7日を予定している。



### 粘菌観察会

- ▶ 講師：和歌山県立自然博物館 川上先生  
和歌山信愛女子短期大学 山岸先生
- ▶ 6月に2回実施



### 昆虫観察会

- ▶ 講師：元和歌山県立自然博物館 約場先生  
ふるさと自然センター 藤五先生
- ▶ 7月に1回実施



### 番所山を愛する会の今後の活動

- ▶ 工事事務所跡地の緑地化の推進
- ▶ 観察会などを通じた環境への理解を深める活動の継続化
- ▶ 南方熊楠記念館と番所山という立地を活かした自然環境保全についてPRを行う。→SNS・行事を利用しての熊楠の唱えたエコロジー思想と自然との共生を発信していく。



## パネルディスカッション

登壇者：志村 真幸（南方熊楠顕彰会理事）  
丸山 宏（花博自然環境助成審査委員会委員長）  
佐倉 統（花博自然環境助成審査委員会委員）  
鷲谷 いづみ（コスモス国際賞委員会委員）

**（佐倉）** 南方熊楠はすごく変わった人だというイメージをずっと持っていたのですが、志村さんの基調講演では、野人ではなく町っ子であったとか、案外戦略的に動いていたとか、新しいイメージでのお話を頂き、興味深く聞かせていただきました。最初に、皆さんから感想や質問を頂きたいと思います。

**（鷲谷）** 志村さんのご講演は本当にタイトルのとおり、私たち自身の未来、持続可能性を考える上で、有益なヒントがたくさん織り込まれたお話でした。また、冒頭で多様な分野で活躍した熊楠を「エコロジーの先駆者」と紹介していただきましたが、エコロジーは日本語では生態学ですので、生態学の一研究者としてうれしく思いました。熊楠がアメリカとイギリスに滞在し、日本に戻って活躍していたのは、ちょうど科学としての生態学が黎明期から発展しつつあった時代です。生態学の研究者たちが自然をトータルで見るということを身に付け、それにふさわしい用語として、生態系（エコシステム）という言葉が提案されたのです。

生態系というのは、1930年ごろ、イギリスの生態学者・タンズリーによって、生物・非生物の大きな要素とその関係からなるシステムとして定義されました。タンズリーは東イングランドのフェンの保全再生のためのモニタリング研究にも参加していた人で、恐らくトータルに生態系を感覚として把握し、それに物理学にも負けない厳密な定義を与えようとして、システムとして定義したのだと思います。湿地であれ、森林であれ、海辺であれ、自然に目を向け、それをトータルに眺めるというのがエコロジーの思想です。生態学は日本では非常にマイナーな学問分野ですが、この定義は少しずつ影響を与え始めているように思います。

ご講演の最後のまとめにも感銘を受けました。身近なものを大切にし、きちんと記録し、それを継続するという事です。地域の自然を考えることはまさにそこから始まりますし、もっと広い地球規模の生態系を見る上でも、そういう感覚は重要だと思います。コロナ禍で、遠くのフィールドにはなかなか行けませんが、身近な自然、地域の自然、庭の自然を見つめて、みんなで見聞を深めていければと思います。

**（丸山）** 僕にとって熊楠は、大酒飲みで、冬でも裸でいるというイメージです。それから、ものすごい記憶力の人で、百科事典を全部覚えているという逸話も聞いたことがあります。

1895年にイギリスでナショナル・トラストが設立されますが、実はイギリスではそれ以前に、1830年代ごろからコモンズを保護しようという運動が始まっていました。そこには緑地だけでなく、民族なども含まれていたのではないかと考えています。こうしたイギリスの事情を熊楠はどの程度知っていたのか、もしご存じであれば教えてください。

**（志村）** 熊楠は浅く広く情報を集める人でしたから、イギリスにいたときも同時代に起こっている出来事にはアンテナを張り巡らせていて、ナショナル・トラストやエッピングフォレストの保全の話などもつかんでいたのではないかと考えられています。ただし、どこまで深い知識を得ていたか、エコロジーや生態学、地域保全といった問題にどこまで真剣に取り組んでい

たのかは疑問です。ただ、ナショナル・トラストにせよ、エッピングフォレストにせよ、自然のままの姿を残すというよりは、人との関わりの中でつくられてきた歴史的・文化的景観を守るというのがポイントかと思います。熊楠は日本の自然に対しても、そういう視点を意識していたようなところがあり、そこにはイギリスでの経験が生かされたのかなと感じています。

**(丸山)** 熊楠は神社合祀に反対していましたが、こうした地域の森というのは、イギリスのコモンズに近いものがあります。コモンズは農業のためにある土地ですが、そこで隣の村とサッカーをしたり、お祭りもやったりする、そういうフィールドだったのです。熊楠が神社合祀に反対したのは、研究対象とする生物がいなくなることはもちろんですが、自然やお祭りなどの民俗的なさまざまなものが神社林の中にあると考えたからではないでしょうか。当時何千もあった神社はそれぞれ特徴を持っていて、それが均一化されてなくなっていくことに危機感を持ったのではないかと想像しています。それはひょっとするとイギリスに行ったときに、コモンズからヒントを得たのかもしれないと思いました。

**(志村)** 確かに、イギリスの教会が日本の神社と同様の役割を果たしているかという疑問で、むしろコモンズと神社を宗教的、文化的、地域的な意味で比較したら面白いかもしれませんね。

**(鷲谷)** イギリスの落葉樹林は、薪炭林として使われたり、狩場の森として人間活動が営まれていました。日本でそれに近いのは雑木林です。エッピングフォレストなどはまさにそうで、狩場の森をヴィクトリア女王が国民に下賜したもので、テーラード仕立てとあって、利用のために途中で切って、また萌芽させているブナ林などもあります。日本の神社の森はそういう使われ方はしなくて、常緑の深い森に神が宿ると考えられて大事にされています。熊楠もエッピングフォレストに行き、日本の森と比較したり、共通点を見いだしたりしたのではないかと感じています。

**(志村)** 日本だと里山に近いような気もしますが、熊楠の書いたものには、あまり里山の話は出てこないのです。そこは今後の課題とさせていただきます。

鷲谷さん、いろいろご指摘いただきありがとうございます。熊楠の場合、アメリカとイギリスの両方を知っているというところが大きかったのではないかと思います。イギリスはある程度人工的な自然になっていますが、アメリカでは原生林に分け入って、そこで変形菌を探したりしていました。イギリスから帰ってくる時も、南回りの船で何カ月もかけて帰ってきて、世界のいろいろな自然を目にしてそれらに興味を持ったというところが、後の熊楠につながったのだと思います。

**(佐倉)** 熊楠は植物に対する博物学的な趣味があり、自然をトータルに捉えるというのは直感的にやっていたのかもしれませんが、当時の学問的なレベルでの生態学はどれくらい彼の身に付いていたのでしょうか。

**(志村)** 結局うまくは身に付かなかったのかなと思っています。どちらかというと神社合祀反対という目的ありきで、そこに生態学が当時最新の方法論としてあったから利用したということだと思います。その後、熊楠が生態学を深め、内在化して、研究として発表したというのは見当たりません。

**(鷲谷)** 熊楠は、植物に対しては特に果樹に関心を持っていて、庭に安藤柑を植えたり、ウメの開花時期を記録したり、今でいう生態系サービスを重視した植物の見方をしていたことが、日記や手紙の内容から読み取れます。また、人づてで台湾からアボカドを入手して、「柑橘類が育つ場所ならアボカドも育つだろう」と、地域の産業振興に役立てようとしていました。こ

うした視点は、地域との関わりという点では重要な熊楠の特性の一つではないかと感じています。

**(志村)** まさにそのとおりだと思います。熊楠はよく分からない人ではありますが、地元愛が強かったことは間違いなく、田辺や紀南を盛り立てていこうとしていました。その中で安藤柑を地元で育てようとしていました。ぜひこれを受け継いで頑張ってもらいたいです。

**(丸山)** 元々紀州藩は本草学が盛んで、山の中にいろいろな薬用植物を植えていたという歴史がありますが、熊楠はそういう方面はどうだったのでしょうか。

**(志村)** 紀州藩の本草学者の系譜に連なることは間違いありませんが、さらに西洋の植物学を向こうで学び、それを合流させたというのが面白いところです。マツバランの栽培も、江戸時代から田辺で盛んに栽培されていた植物を近代西洋植物学の手法で分析しようとしたところが熊楠ならではの点だと思います。

**(佐倉)** 志村さんのご著書『南方熊楠のロンドン』では、イギリスやヨーロッパで科学が広がっていく中で、非西洋の知識のようなものが欧米の科学者たちの視野に入っていくって、ちょうどそこに日本から来た熊楠の知識がはまると。それは植物だけではなく、星座や民俗学など多岐にわたり、グローバルに対置する日本という地域性の面でオリジナリティを発揮したということが書かれていました。また、熊楠は日本に帰国してからも、研究職には就かずずっと地域で暮らし、植物学や生態学のような普遍的な学問ではなく、民俗学という地域性に根ざさざるを得ない学問へと進んでいきました。熊楠は、中央と地方の関係をどのように考えていたのでしょうか。

**(志村)** 私は従来は、中央の大学に所属している学者たちとは反目していて、東京を飛び越えて直接「Nature」などの科学雑誌に投稿することでロンドンとつながっていたと考えていました。ただ、最近では在野のネットワークというのがまた別に存在したのではないかと想像しています。熊楠はすごい手紙魔で、いろいろな人とやりとりしているのですが、その宛先を見ると、大学には所属していない多くの研究者とつながっていて、東京にいようなロンドンにいような関係なく、彼らと対等の立場でやりとりをしているのです。アカデミックな世界ではない、アマチュア、在野としてのネットワークが、熊楠の中ではむしろ重要だったのではないのでしょうか。

**(佐倉)** 日本が明治以降の近代化に成功したのは、地方の力が強く、中央以外の地域の教育水準も経済力も文化水準も非常に高かったことが一因だと私は思っています。今は少子高齢化もあり、人口も減って経済的にも地方が苦しい時代だと思いますが、そういう時代にあって、地方ならではの役割というか、地方だからこそできることというのは、何が考えられるのでしょうか。

**(鷲谷)** 熊楠が学問を生活の糧にはせず、日常生活の中での研究スタイルを築いたというところは、ダーウィンに似ています。同じ関心を持つ世界中の人と手紙のやりとりをしながら、自分のやりたいことを自分の家や庭でやっていくという学への関わり方は、現代ではもう成り立たなくなっています。生活を成り立たせるためにあくせく研究しなければならないので、残念ながら、やりたいことを思う存分研究できなくなっています。もし余裕があって、市民でそういうことのできる方がいたら、ぜひ庭の生態学、地域の散歩道の生態学として、自然に関する学問を発展させてくださったらいいと思います。

**(丸山)** 南方熊楠を植物学や民俗学といったばらばらなもので切っていくというのは近代的な科学の手法であって、本当はそれぞれが密接に関連していて、熊楠の中ではある程度完結し

ていたのではないかと思います。そういう彼の知の構想は、今の時代において非常に重要な存在です。われわれは学者といわれていますが、狭い範囲で行う研究というのは、だんだん先細りしてきているように思います。そういう意味では、熊楠のことを多角的・総合的に見ること  
で学ぶことは非常に多いのではないのでしょうか。またぜひどこかでお会いして、雑談をしながら本質論をお話しできればと思っています。

**（志村）** 目的志向のあり方というのが行き詰まりかけているのではないかと思います。熊楠もこれといった目的があって研究していたわけではなく、自分の好きなことを突き詰めてやっていったら、100年後の今、何か役立つものがあったということだと思のです。地方もそれと同じで、短期的な目標を立てて何かをするのではなく、自分たちの地域を生かして自分たち自身を盛り立てるようなことをやっていけば、その先に何かいいものが転がっているのではないかと感じています。

**（鷲谷）** 南方熊楠顕彰館の活動はまさにそういうものだと思います。いろいろな読み物を読むよりも、そこに行けば理解できることがたくさんあるので、コロナ禍が落ち着いたら、ぜひ熊楠の活動を肌で感じられる南方熊楠顕彰館を訪れていただければと思います。

**（佐倉）** 現地に行かないと分からないことがある一方で、現代では昔と違い、今私たちが遠隔会議をやっているように、物理的な距離を越えてつながる方法があります。コロナ禍になり、必ずしも大都市に住まなくてもリモートで仕事ができる状況にもなってきています。そういう意味では、熊楠のときとは違った形で、地域ならではの活動や生き方も考えられるし、むしろ選択肢は広がっていると思います。本日は、非常に示唆に富むお話を頂き、ありがとうございました。

花博自然環境助成シンポジウム  
「熊楠から受け継ぐエコロジーの思想と未来に向けて」

令和3年8月

---

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
〒538-0036

大阪市鶴見区緑地公園 2 番 136 号

TEL 06-6915-4516

FAX 06-6915-4524

URL <https://www.expo-cosmos.or.jp>